

オホーツクの流水は
豊かな海を育てる



冬の訪れとともに、オホーツク海北部のシベリア大陸沿岸で最初の海水が生まれる。凍る範囲が次第に南へ広がっていき、流水はやがて、北海道のオホーツク海沿岸に近づいてくる。そして流水が接岸すると、沿岸は一気に厳しい寒気に覆われる。

流水はかつて、この地域に住む人々や漁業者にとっては邪魔者であった。流水の接岸した沿岸では漁ができないばかりでなく、浜が荒らされると漁業者たちから嫌われていた。しかし、その浜は、漁業ができないという負の結果ばかりではなく、雑海藻が除去されるため

昆布の着床がよくなるほか、流水の下には、種々のプランクトンなどが流水とともに到来して底魚などの餌になるなど、浜を豊かにしていることも分かってきた。

1987（昭和62）年2月、アラ

スカの油田開発に移動用乗物として開発された実験船は、世界初の流水砕氷船「ガリンコ号」と名づけられ紋別市で就航した。船首水面付近にある流水を砕く巨大なドリルで、沖合まで航行できる砕氷船は、冬の海の厳しさやその不思議を人々に伝えたのである。この「ガリンコ号」就航によって、北海道北東地域の新たな観光展開へとつながった。それまで、夏主体であった観光が、冬にも新しい魅力を持つて現われたのである。その後、網走市でも新たな観光砕氷船が就航し、オホーツク海沿岸各地に、冬の観光客誘致に向けての努力が続いている。

それとともに新しい冬の魅力が生まれてきた。1996（平成8）年に紋別市の沖合1kmに造られたオホーツクタワーは、海底7・5mから、流水の観察や流水下のさまざまな生き物の生態観察ができる施設である。流水の下の世界が初めて人々の目に触れ、海の中に住むいろいろな生物の生態や動きが関心を呼んでいる。その中の代表格は「クリオネ」である。巻貝の一種である「クリオネ」はその愛らしさで、多くの人々を魅了している。また、外からの観察だけではなく、新しい体験型観光とも言える流水の下へのダイビングも人気を呼んで、年々盛んになってきている。

このような新たな観光のきっかけを与えた初代「ガリンコ号」は1996（平成8）年3月に最終運航となり、現在は翌年の1月に就航した「ガリンコ号Ⅱ」が活躍している。

Data



●お問い合わせ先

[流水に関するお問い合わせ]

北海道立オホーツク流水科学センター事業課

Tel. 01852-3-5400

[ガリンコ号に関するお問い合わせ]

オホーツク・ガリンコタワー(株) Tel. 01582-4-8000

[全般的なお問い合わせ]

紋別市流水都市推進室

Tel. 01582-4-5300

降毎年2月に、世界各国の流水研究者が一堂に会する「北方圏国際シンポジウム」を開催しており、紋別市は、流水研究国際都市を宣言するなど「流水研究のメッカ」ともいえるまちになっている。

オホーツク海沿岸地域は、北海道の中では最も豊かな海である。それは流水のもたらした恵みなのであろうか。まだまだ自然界には解明されていないことが多いが、一時は「厄介者」と呼ばれた流水が、地元の人々の知恵と工夫で「オホーツクからの贈り物」と呼ばれるようになり、かけがえのない宝物となった。